

エッセイ

あれも見たい！これも撮りたい！～私の昆虫撮影記～
(その2 ハンミョウ・マメハンミョウ・ツチハンミョウ)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

昆虫の写真を撮っていると、「被写体としての昆虫」に、これまでとは違った視点で興味が湧いてくる。例えば、あまり目立たない色彩をしたカメムシや、背景に溶け込むような色や形のバッタ等、これまで見逃していた昆虫に注目してしまう。その一方、ふと見かけた鮮やかな色の昆虫たちを見ると、やはり急にテンションが上がり、ついつい撮影枚数も多くなってしまふ。いくら通ぶって「目立たない昆虫を撮影してこそ」なんて言っている、結局のところは目立つもの、美しいものに惹かれてしまっているようである(笑)。

美しい昆虫、色が派手な昆虫という、まずチョウが思い浮かぶ。また甲虫類やキンカメムシの仲間等にも大変美しい色合いのものが多い。なかでも甲虫類は世界では35万種以上、日本でも1万種以上と昆虫綱で最も多くの種数を誇り、ルリボシカミキリやヤマトタマムシなど美しい色彩や金属光沢を持つ種が少なくない。そんな美しい甲虫のなかで、私の撮影意欲が高まるのはハンミョウである。ナミハンミョウのように美しい金属光沢を持つ種はもちろん、一見地味でも渋い光沢がある種などにもテンションが上がる。

でもなぜハンミョウなのだろうか。思うに、彼らは私が満足する写真を、なかなか撮らせてくれないからだと思う。ハンミョウは捕食性で比較的大きな大あごを持っている。私はこの大あごが写っていないと良い写真にならないと考えているが、それには彼らを前方から撮影する必要がある。しかし「道おしえ」という別名があるハンミョウは、警戒心が強く危険を感じると飛び立ち、少し離れたところに降り立つ習性があるので、大あごを写すどころか前方に回り込むのも大変である。ハンミョウを見つけると、地面にいる彼らを撮影するため匍匐前進

で近づき、何度も飛び立ててしまうものの、とうとう根負けしたのか彼らが撮影に応じてくれたとき、なんとも言えない満足感が得られるのである。しかしそんな私の撮影する姿を見た人はどう思うのだろうか、気にしても仕方がないが…。

さて、同じコウチュウの仲間には、ほかにも「ハンミョウ」という名前が付いているものがある。ハンミョウはハンミョウ科に属するが、ツチハンミョウ科に属するマメハンミョウとツチハンミョウである。そもそも「ハンミョウ(斑猫)」という名前は、こちらの昆虫たちを指すそうだが、毒物であるカンタリジンを持つこれらのハンミョウは、分布が局所的なので、撮影の機会が少ない。特にマメハンミョウは、赤い頭部を持つ特徴的な形態から、一度見てみたいと思っていた。最近では都市部を中心に激減しているということだったが、見たいと思い始めて20年目の今年、待望だが意外にもあっけなく撮影することができた。場所はずっと探していたダイズ畑ではなく、たまたまの幼虫をさがしていたゴボウ畑で見つけたのであるが、ほかの場所には全然いなかったので、まさにその場所を見てよかったというものであり、運命的な？出会いに感謝した。

一方、このところは全くお目にかかっていないツチハンミョウだが、最近では春先の作物を食べて「害虫化」しているものがあると聞く。来春の畑地での出会いにも期待したい。

「見たい」「撮影したい」と思って活動していれば、いつかはその願いは叶うのだと信じ、日頃から外に出て昆虫と出会う機会を作っていこうと思っているが、いつも外に出ているわけにもいかず、時間との兼ね合いに苦心する毎日である。



図-1 ハンミョウ



図-2 マメハンミョウ